国語科（言語文化）学習指導案

日　時　令和 7 年 11 月 18 日（火）
　　第 5 校時 13：15～14：05
学校名
対　象　第 1 学年　　組　　名
会　場　5 階　1 年　組教室
授業者

1　単元名

単元名　漢文に親しみ、ものの見方や考え方を深めよう。
教材名　「論語」（言語文化『言語文化』大修館書店）

2　単元の目標

・　古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。　〔知識及び技能〕(2)ウ
・　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつことができる。　〔思考力，判断力，表現力等〕B(1)オ
・　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　「学びに向かう力、人間性等」

3　本単元における言語活動

作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。
（関連：〔思考力，判断力，表現力等〕B(2)イ）

4　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①　古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。（(2)ウ）	②　「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化ついて自分の考えをもっている。（B(1)オ）	①　漢文や身の周りの言葉に興味・関心をもち、粘り強く文章の叙述に即して読み取ったことから、自分の考えをもとうとしている。

5　指導観

(1)　単元観

本単元は、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）国語「言語文化」　2　内容〔思考力、判断力、表現力等〕B 読むこと(1)の指導事項

> オ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

を受けて設定した。

本単元では、送り仮名や返り点等の学習を通して漢文訓読の基礎的な力を習得し、現代語訳を通して漢文に触れ、格言や論語、および論語の注釈を用いて漢文に親しむことを目指す。

入学後、初めての漢文学習となるため、中学校段階での学習の復習に重点を置きつつ、評論文や物語文を読む際と同様に、叙述に即した読解を行い、内容を解釈する。各教材で提示される、ものの見方や考え方について自己や他者との対話を通し、考えを深められるようにする。必要に応じて現代語訳を配布し、文章の内容について理解が深められるようにする。生徒からの発言や意見を尊重し、漢文に親しめるように粘り強く指導する。

(2)　生徒観

本校の生徒は、学習に対して苦手意識をもっている生徒が多く、特に国語においては年度当初のアンケートで七割の生徒が不得意と回答していた。１学期は評論文や短編小説を題材に叙述に即して文章を読むことについて学習し、２学期中間考査までは、歴史的仮名遣いの学習や現代語訳を用いて古文を読み、歴史的な文章に親しんできた。粘り強く指導を続けることで、毎授業で実施している本時のまとめの記述や定期考査の記述問題にも取り組めるようになってきた。漢文でも、これまで同様、叙述に即して文章を読むことに取り組む。生徒は、第２学年で「現代の国語」、第３学年で「論理国語」を履修するため、漢文の学習に充てる時間は本単元が最初で最後となる。歴史的な文章や言語活動を通して、言葉がもつ価値への興味や認識を深め、高等学校における古文学習の基礎基本的な資質・能力を育めるように指導していく。

(3)　教材観

本教材は、「漢文に親しむ」という章において、「私たちと漢文」に続いて配列されている。「論語」は、春秋時代の思想家である孔子とその弟子たちの言行や問答を集めた書物であり、ものの見方や考え方を学ぶことができる。古くから多くの日本人に親しまれており、解釈や注釈がなされてきた。中学校の教科書にも多く採録されていることから漢文訓読のきまりを用いて文章に触れ、基礎的な能力の復習や定着に効果があることに加え、注釈書を読むことで、漢文の世界に親しむことができるようにする。

なお、生徒は国語や漢文に対する苦手意識が高い。訓読文を書き下し文に改めたのち、現代語訳を活用し、文章を読解する。また、文中で表された内容について検討し、自分に置き換えて考えることで、現代に生きる言葉や考え方について理解を深められるようにする。論語の内容や注釈について検討する過程で古人と対話し、生徒は自らの言語感覚を豊かにすることができると考える。

６　年間指導計画における位置付け　（第１学年　「言語文化」　読むこと）

	教材名	重点指導事項
１学期 （中間）	・ 言語文化への視点 「世界を見わたす窓」	ア　文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。
１学期 （期末）	・ 表現の多様性 「良識派」、「鞄」	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
２学期 （中間）	・ 自然へのまなざし 「徒然草」、「枕草子」	イ　作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。
２学期 （期末）	・ 現代に生きる言葉 「私たちと漢文」、「論語」 「孟子」	オ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。
３学期	・ 言葉の紡ぐ世界 「羅生門」	ウ　文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。

7　単元の指導計画と評価計画（６時間扱い）

過程	時	目標	学習活動	評価規準(評価方法)
導入	第１時	練習問題に取り組み、漢文学習に対する自分の意欲を書くことができる。	１　漢文学習に関する資料を読む。 練習問題に取り組み、漢文学習に対する自分の意欲を書くことができる。 ２　送り仮名について学習する。 ３　練習問題に取り組む。 ４　練習問題の取り組み状況を含めて、漢文学習に対する自分の考えを書く。	ウ−①　練習問題の解答状況を踏まえて、漢文学習に対する自分の意欲を書いている。（記述の分析）
導入	第２時	訓点に従って書き下し文に改めることができる。	１　白文を読み、訓点の重要性を知る。 訓点に従って書き下し文にすることができる。 ２　返り点と置き字について学習する。 ３　練習問題に取り組む。 ４　冒頭に提示した白文の訓読文を提示し、書き下し文に改める。	ア−①　訓点に従って書き下し文に改めている。（記述の分析）
内容の把握	第３時	「十有五にして学に志す」を訓点従って書き下し文に改めることができる。	１　「不惑の年」という語の意味を考える。 「十有五にして学に志す」を訓点に従って書き下し文に改めることができる。 ２　訓読文を書き下し文に改める。 ３　教科書を参考に、書き下し文を相互採点する。 ４　現代語訳を参考に、各年代の成長段階をまとめる。 ５　改めて、訓読文を書き下し文に改める。	ア−①　訓点に従って書き下し文に改めている。 ウ−①　これまでの学習を生かして、訓点に従って書き下し文に改めようとしている。（記述の分析）

内容の把握	第４時	「学びて時に之を習ふ」と「学びて思はざれば」を読み、二つの文章の要旨を捉えることができる。	1　勉強する際に大切なことを考える。 「学びて時に之を習ふ」と「学びて思はざれば」を読み、二つの文の趣旨を捉えることができる。 2　訓読文を書き下し文に改める。 3　注釈を参考に、現代語に改める。 4　現代語訳を参考に、二つの文章の要旨を捉える。	イ-①　二つ文章の要旨を八十字以内で書くことができる。 （記述の分析）
考えの形成、共有	第５時	「父母唯其疾之憂」を読み、「親孝行」の具体例を書くことができる。	1　論語で語られる親孝行とはどのようなものか考える。 「父母唯其疾之憂」を読み、「親孝行」の具体例を書くことができる。 2　訓読文を書き下し文に改める。 3　二通りの解釈を提示し、違いを理解し、自分が考える高校生や十代後半にできる「親孝行」の具体例を書く。 4　『論語古義』に示された伊藤仁斎の注釈の訓読文を書き出し文に改める。	イ-①　「父母唯其疾之憂」という語の解釈の違いを踏まえ、自分が考える「親孝行」の具体例を書いている。 （記述の分析）
考えの形成、共有	第６時 (本時)	「父母唯其疾之憂」や『論語古義』を読んだ気付きを書くことができる。	1　提示されたヒントに基づいて、『論語古義』に示された伊藤仁斎の注釈を現代語訳する。 「父母唯其疾之憂」や『論語古義』を読んだ気付きを書くことができる。 2　高校生や十代後半にできる親孝行について考え、クラスメイトと意見交換する。 3　伊藤仁斎の解釈を検討する。 4　伊藤仁斎の解釈について触れ、高校生や十代後半にできる「親孝行」に関する、自分の気付きを書く。	ウ-①　「親孝行」に関する漢文を通して、自らの学習を調整しながら、自分の考えをまとめて書こうとしている。 （記述の分析）

8　指導に当たって

班テーマ 「主体性を重んずる授業展開」

(1)　単元指導計画の工夫

第５時では、「親孝行」に関する異なる解釈について自らの立場を書き、第６時では、「高校生や十代後半にできる親孝行」について考える。第６時において、他者と意見を共有した上で改めて「親孝行」について記述する。生徒が主体的に自らの考えを深めることができるよう、「親孝行」に関する自らの意見をあらかじめ考えた上で意見交流を行うようにした。

(2)　授業方法の工夫

訓読文を書き下し文に改める際には、一枚のプリント内に訓読文と書き下し文に改めるためのスペースを上段下段に分けて配置し、情報が一枚のプリントで完結するようにする。また、全体での意見共有の際には、プレゼンテーションツールを活用し、各グループにおける活動を全体が把握しやすいようにする。

(3)　評価方法の工夫

主体的に学習に取り組む態度を評価するために、「親孝行」に関する自分の考えを書き、他者の考えとの意見交換を行うことで考えが深まるようにする。その活動における主体的な取組姿勢と粘り強さを基に評価する。

9　本時（全６時間中の第６時間目）

(1)　本時の目標

「父母唯其疾之憂」や『論語古義』を読んだ気付きを書くことができる。

(2)　本時の展開

<table>
<tr><th>時間</th><th>学習活動</th><th>指導上の留意点</th><th>評価規準(評価方法)</th></tr>
<tr><td rowspan="3">導入
10 分</td><td>１　既習事項の復習を行う。</td><td></td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>２　提示されたヒントに基づいて、『論語古義』に示された伊藤仁斎の注釈を現代語訳する。</td><td>・　クイズ形式にし、生徒が取り組みやすいようにする。</td></tr>
<tr><td>３　本時の学習課題を確認する。</td><td>・　本時の目標を共有し、授業や活動の見通しをもてるようにする。</td></tr>
<tr><td>展開
I
30 分</td><td>４　高校生や十代後半にできる親孝行について考え、クラスメイトと意見交換する。

５　『論語古義』に示された伊藤仁斎の注釈は前時に扱った解釈のうち、「子が親の健康を心配すること」か、「子が健康でいること」かを検討する。</td><td>・　複数人と意見を交換することを条件とし、多くの意見に触れられるようにする。

・　伊藤仁斎は、親の健康について触れていることを繰り返し確認する。</td><td></td></tr>
</table>

「父母唯其疾之憂」や『論語古義』を読んだ気付きを書くことができる。

展開 Ⅱ ５分	６　伊藤仁斎の解釈について触れ、高校生や十代後半にできる親孝行について、自分や他者の考えを書く。	・　書く際には具体例を挙げることや、自分が書いた内容のどのような点が「親孝行」にあたるのか、などのポイントを説明した上で、生徒に書くように促す。	ウ-①　「親孝行」に関する漢文を通して、自らの学習を調整しながら、自分の考えをまとめて書こうとしている。（記述の分析） 「おおむね満足できる」状況Ｂの例：「父母唯其疾之憂」や『論語古義』の解釈や他者との話し合いを通して自らの学習に見通しをもち、自分が考えたことをまとめている。
まとめ ５分	７　本時の学習内容について振返る。	・　次回は、古文や漢文の学習を終えて、古典学習に対する意義について自らの考えを書く時間となることを伝える。	

(3)　板書計画

ＩＣＴ機器による投影
〈内容〉
①『論語古義』に示された伊藤仁斎の注釈を現代語訳する際の選択肢
②本時の目標
③高校生や十代後半にできる親孝行について考える際のポイント
④伊藤仁斎の注釈を解釈する際のポイント
⑤「親孝行」について自分や他者の考えを書く際のポイント

⑷　授業観察の視点

- 本時の目標は達成されていたか。
- 授業のテーマや用いた教具は適切であったか。
- 生徒が主体的・対話的に学習活動に取り組めていたか。
- 生徒が興味・関心をもって授業に取り組めていたか。

東京教師道場（２年次）　　国語　　高等学校２班

研修の概要

１　東京教師道場について

４名の部員と１名のリーダーと担当教授からなる班で、主に授業観察と協議からなる授業研究を行う２年間の研修である。

<table>
<tr><td rowspan="3">1
年
次</td><td colspan="3">第１期　把握・点検期</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td></tr>
<tr><td>第１回
授業研究</td><td>第２回
授業研究</td><td>第３・４回授
業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第５～10 回
授業研究</td></tr>
<tr><td>教職員研修
センター</td><td>リーダーの
所属校</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td></tr>
<tr><td rowspan="3">2
年
次</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td><td colspan="4">第３期　自立・完成期</td></tr>
<tr><td>第 11 回
授業研究</td><td>第 12～14 回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第 15～19 回
授業研究</td><td>第 20 回授業研究</td></tr>
<tr><td>教職員研修
センター</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td><td>教職員研修
センター</td></tr>
</table>

・　２年間で３回、学校種を越えた授業研究を実施した。

・　夏季休業期間には、夏季集中協議として、模擬授業や授業力の自己診断に基づく協議、教材や実践事例の紹介等を行った。

２　班での取組及び班テーマについて

<table>
<tr><td>第１期

把握・
点検期</td><td>班の部員の所属校は、生徒の実態が様々である。そのため、生徒の資質・能力の育成を目指す上で、生徒の実態に応じた教材研究や目標設定が求められる。部員は各所属校で、生徒の資質・能力を育み、学習意欲を促せるよう、教材研究・指導を行い、試行錯誤を重ねてきた。授業実践を振返り、課題として、授業内で生徒自らが学習を調整したり、粘り強い取組を行ったりして、主体的に学習に取り組む態度の伸長を促すことや、その能力について適切な評価を行うことが必要だと考えた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２期

発展・
充実期</td><td>「指導と評価の一体化―第三観点を中心に」</td></tr>
<tr><td>「指導と評価の一体化」が求められているが、漠然としており、特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価については各々の教員が悩んでいるという点が、高等学校２班では課題として挙がった。そこで、学習調整力や粘り強く取り組む態度について評価する方法を実践していくことを目標とし、班テーマとした。評価ができたとしてもそれを行うために多大な時間がかかってしまう可能性も考えられ、持続不可能で再現性を欠いたものとなる。そこで、教員の働き方を考慮しつつ再現性を担保しながら生徒の学びに寄与する評価方法を模索した。
第２期の成果として、意見交流により考えを深め、同じ問題に再度取り組んだものの評価をすることで粘り強さの可視化を図った。それにより、学習調整力や取り組みへの粘り強さを高める指導と評価を考え、実践することができた。生涯にわたって自己を向上させるために、学習における意欲や粘り強さが求められることを踏まえると、「生徒の主体性とは何か」について改めて考え、授業展開の実践に生かすことが今後の課題である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第３期

自立・
完成期</td><td>「主体性を重んずる授業展開」</td></tr>
<tr><td>第２期の授業研究を受けて、生徒の学習調整力を伸長することや課題に粘り強く取り組む機会を意図的に授業に組み込むことが大切だと考え、本目標を設定した。適切な評価をすることに加え、授業の中で生徒の主体性を高める手立てを考え、研究授業で提案する。</td></tr>
</table>

3　成果と課題

		成果	課題
授業力の6要素	使命感、熱意、感性	日頃から強い使命感をもって、授業準備から授業改善までを行うことができている。また、校外での研修にも積極的に参加し研さんに励んでいる。	授業力向上に向けて、多くの授業を見学する必要がある。所属校の授業だけでなく、異校種の授業見学も積極的に行い、多くの生徒に対応できる指導力を身に付けられるようにする。
	児童･生徒理解	授業では、生徒が出来たことを積極的に見取り、声を掛けている。また、困難な課題に取り組む生徒にも、粘り強く学習に取り組ませることができている。	生徒一人一人の学習状況は様々であり、指導が十分に行き届いていない。生徒を観察し、生徒の学習状況に合わせた課題を提示し、成長に結びつける。
	統率力	規律ある学習環境を作ることができている。指示する際にも、具体的な指示を出すことで、生徒が学習に取り組める状況にしている。	発言しやすい雰囲気作りが課題である。メリハリある授業を心がけ、生徒が自らの考えを相互に伝え、他者の考えを通して学び合えるよう改善する。
	指導技術(授業展開)	各時間の目標を達成できるような授業を展開することができている。また、目標に応じて言語活動に取り組ませ、生徒の思考力を伸ばすことができている。	単元全体の目標と各時間の目標が合致していないことが稀にある。一時間の目標と単元全体の目標の関連を更に検討する必要がある。
	教材解釈、教材開発	授業で扱う文章やテーマと関連する文献にも触れている。生徒にも提示し、複数の視点から教材を解釈できるようにしている。	コラボレーションツールを活用して学習活動に取り組ませている。予習等において ICT 機器をより多くの場面で活用し、生徒の学びを充実できるように教材開発をする。
	「指導と評価の計画」の作成・改善	学習活動に即した具体的な評価を行うことができている。評価の精度を一層高められるよう評価規準についても検討している。	班テーマとなっている主体的に学習に向かう態度の評価について具体的な評価方法を探る。他の観点と関連させて評価できるよう計画する。